

# 文章完成法による自己と家族との関係の表現について

## —— 既婚者を対象として ——

臨床心理学科 荒 井 真太郎

### 抄 録

本研究においては、既婚の男性156名（19歳～69歳）、女性156名（16歳～69歳）を対象として、文章完成法により自己と家族との関係について、年代別、性別、配偶者との離別経験の有無による特徴について検討した。荒井（2018）において用いた回答の分類カテゴリーを基にして、家族から自己に対する関わり、また自己から家族に対する関わりについての回答を分類、検討した。各カテゴリーの回答数の比較から、家族から自己への関わり、自己から家族への関わりについて、年代によって関係への配慮に関する回答に違いが見られ、また性別による違いは、家族からの要求、家族への役割・責任意識、願望に関する回答において表れた。これらの結果から、家族のライフサイクルにおける夫婦のそれぞれの立場の理解に繋がる見方が得られた。

**Key Words：**自己と家族との関係、文章完成法、既婚者

## I. 問題と目的

### 1. 文章完成法による自己と家族の関係に対するアプローチ

荒井（2012）は、家族イメージの研究として、文章完成法（SCT）を用いて、青年期の未婚群と成人期の既婚群を対象として、自己と家族との関係について検討した。その結果、既婚（成人）群と未婚（青年）群では、家族と自己との関係に関して、「自己から家族に対して」と「家族から自己に対して」という項目によって、両群に異なる傾向が見られた。「家族から自己に対して」の項目への回答については、両群に差が見られなかった一方で、「わたしは家の人に対して」の項目で、「支持・受容・肯定的態度」「非難・厳格な態度」「願望」の回答数

の割合は既婚群の方が高く、「依存・期待」「不満・否定的態度」の回答数の割合は未婚群の方が高かった。

上記の研究については、未婚群の平均年齢が19.5歳であったが、より広い範囲の年齢層の未婚群における自己と家族の関係を捉えるため、青年期から老年期までを対象とする調査を行った（荒井，2018）。

その結果、項目「家的人是わたしに対して」に関して、「支持」のカテゴリーに関する回答は、男性においては、年代によって差が見られたのに対し、女性においては、年代による変化は見られなかった。また、家族の考えや感情を「不明」とする回答は女性より、男性に多かった。さらに、家族からの関わりが「厳格」であるとする回答は、10～20代の女性で多かった。

一方、項目「わたしは家の人に対して」については、家族への「支持」の回答は、年代別では若年層ほど多い傾向があった。また、「不満」、「願望」に関わる回答は女性に多く、「無関心」とする回答は男性に多い傾向が見られた。

そこで本研究においては、これらの分析方法を、既婚群を対象に用いて、自己と家族の関係について、年代、性別、さらに結婚経験に関して、配偶者との離別経験の有無による特徴について検討する。

## 2. 青年期以降の既婚者における自己と家族との関係

既婚者における自己と家族との関係に関わる研究として、結婚満足度に着目した研究が挙げられる(柏木, 2006; 柏木, 2016)。池田・伊藤・相良(2005)、伊藤(2015, 2016)によれば、男性・夫の方が、女性・妻よりも結婚満足度が高い傾向にある。伊藤(2016)は、日本の夫婦では、妻と夫で結婚満足度の差が大きく、妻の満足度は夫よりも著しく低いこと、また、妻においては子育て期に満足度が著しく低下するが、夫においては子育て期から満足度が漸減する程度であることを指摘している。結婚満足度の要因として、柏木(2006)は、妻が職業を持っているか、あるいは妻の社会的活動への参加が結婚満足度において重要な意味を持っていることを指摘している。

伊藤・相良(2012)は、中年期から高齢期にかけて、夫婦の愛情がどのように変化するか検討を行い、配偶者への愛情得点は、一貫して男性の方が高い傾向にあるが、男女とも40代を底として緩やかに上昇し、高齢期に入る70代で最も高くなることを明らかにした。

夫婦関係に関する研究として、稲葉(2002)は、未婚者、有配偶者、配偶者との離別者の比較を行い、男性の場合は、有配偶者における

ディストレスはどの年齢層でも一貫して低い傾向があり、配偶者との離別経験者は、一貫してディストレスが高いことを指摘した。また、女性においても、配偶者との離別経験者のディストレスが高い傾向にあることは男性と同様であるが、女性の未婚者のディストレスは、60代以降に高まり、配偶者との離別経験者よりも高い傾向があるという。稲葉のこれらの指摘から、夫という立場が、男性において心理的な安定に大きく寄与していると考えられる。

既婚者における自己と家族の関係に関して、東海林(2013, 2016)は、新婚期や中年期の夫婦間葛藤の際のポジティブ、ネガティブな表出など、夫婦のコミュニケーションの特徴を取り上げている。夫婦間葛藤は、日常的で些細なものから、結婚満足度や夫婦関係に重大な影響を及ぼし、離婚に繋がるレベルにまでわたるものである。東海林は、日本においては、夫婦間葛藤に関する研究はまだ少ない状況にあると指摘している。

平木(2013)は、日本においては、他の先進諸国よりも離婚率が低い、夫婦における「性格の不一致」という漠然とした理由が離婚の第1の原因となっており、配偶者間の心理的な問題に関わる様々な要因、背景についての研究の必要性を指摘している。結婚関係や家族生活を維持する上で、夫婦という立場によって、自己と家族との関係の見方にどのような違いがあるかを理解するための研究が必要である。

一方、自己と家族の関係には、夫婦関係だけでなく、親子関係、きょうだい関係、祖父母との関係などが多層的に関わっている。親子関係の発達に関しては、ペアレンティング(養育)や愛着形成を中心とした研究があり(福丸, 2019)、子育てをめぐり親子関係は夫婦関係にも影響する。既婚者にとって、自己と家族との関係においては、夫婦関係と親子関係をはじめとする多重の関係が長く続くことが想定され、

そこにおける多重の役割を担うことが家族のライフサイクルにおける発達課題であると考えられる。

### 3. 多様な文脈の中に置かれている家族と自己の関係

家族関係の発達をテーマとする実証的研究においては、両親とその子どもから構成される核家族を一般的なモデルとする傾向があるが、McGoldrick, Carter, & Garcia (2016) は、現代のアメリカ社会における多様な家族のライフサイクルについて、実証的研究と臨床事例から明らかにしている。McGoldrickらは、夫婦、きょうだいなど家族の構成員ごとの家族のライフサイクルを論じている他に、社会階層、人種、宗教的背景、LGBT、家族の離別、移民家庭、一人親家庭、再婚家庭、などに該当する場合の家族についてのライフサイクルについてのモデルを提示している。

Ahrons (2016) は、離婚後の親子関係や拡大家族との関係について、アフリカ系のアメリカ人の家族においては、白人のアメリカ人家族とは異なる傾向があることや、レズビアンやゲイのカップルが離別した後の親子関係などについて論じている。多様な社会的背景を持つ家族や、離別後の家族関係の発達を視野に入れることも現代の家族心理学において求められている。

多様な家族的な背景を持つクライアントに対する心理的援助に関する事例的研究については、日本においても蓄積されているが、McGoldrickらのように、多様な家族に関してライフサイクルを明らかにして、家族やその構成員の人生全体を俯瞰的に見通しを持てるようなモデルを提示する研究の蓄積が必要である。

様々な家族の状況と、さらに、家族内における複数の立場を共通の枠組みにより比較して、それぞれの立場を理解するためのアプローチと

して、家族に関する文章完成法は有効であると筆者は考える。このアプローチは多様性を増す現代の日本社会の家族に関わる相互理解にも繋がる可能性がある。

### 4. 本研究の目的

本研究においては、青年期以降の既婚者を対象として、自己と家族との関係について、文章完成法により調査を行う。荒井 (2018) は、青年期以降の未婚者を調査対象として、「自己から家族に対して」と「家族から自己に対して」という項目に対する回答内容を分類しており、本研究においても、その分類カテゴリーを基にして、回答の分類を試みる。

また、カテゴリーに分類された既婚者の回答に関して、年代、性別、配偶者との離別経験によって特徴的な傾向が見られるかということについて検討する。

## II. 方法

### 1. 調査の実施・対象者

2018年1月に、インターネット調査会社の保有する調査モニターで、既婚の男性156名（年齢範囲：19歳～69歳、平均年齢：42.13歳（SD=13.91））、既婚の女性156名（年齢範囲：16歳～69歳、平均年齢：40.52歳（SD=15.94））を対象として、インターネット調査を実施した。年齢層については、10代・20代・30代・40代・50代・60代の各年代の男女ともに26名ずつが割り当てられた。文章完成法の項目への回答に先だし、調査の目的、および倫理的配慮に関する説明文が最初に提示された。

調査対象者の職業等については表1のとおりである。

表1 調査対象者の職業

	会社員	パート・アルバイト	自営業	公務員・団体職	学生	無職	その他
女性	24	32	3	2	3	66	26
男性	104	4	16	18	1	11	2

調査対象者のうち、配偶者との離別経験（離婚・死別）のない者は275名（女性133名、男性142名）、離別経験のある者（うち再婚者3名を含む）は37名（女性23名、男性14名）であった。

配偶者との離別経験のない者の婚姻期間（男女別、年代別）は表2、表3のとおりである。

表2 離別経験のない者の婚姻期間（男女別）

	0-9年	10-19年	20-29年	30年以上
女性	77	15	15	26
男性	70	28	20	24

表3 離別経験のない者の婚姻期間（年代別）

	0-9年	10-19年	20-29年	30年以上
10/20代	101	0	0	0
30/40代	44	37	13	0
50/60代	2	6	22	50

配偶者との離別経験があり、一人親となっている場合の、離別後の期間の平均年数は、14.24年（SD=7.79）であった。

## 2. 質問項目

文章完成法により、自己と家族との関係に関して、「家の人はわたしに対して」、「わたしは家の人に対して」の2項目への回答を求めた。

教示文として、「以下の設問では、家族などについての書きかけの文章を完成させるように入力してください。入力欄の枠の上にある言葉を見て、あなたの頭に浮かんできたことを、そ

の言葉につづけて入力欄に文章として入力し、書きかけの文章を完成させて下さい。」と提示し、例文の下に回答欄を設けた。

## Ⅲ. 結果

### 1. カテゴリーの分類

荒井（2018）と同様に、「家の人はわたしに対して」、「わたしは家の人に対して」の2項目への回答の分類カテゴリーを共通のものに近づけると同時に、両者の分類カテゴリーの違いからそれぞれの特徴を捉えることを考慮して、各回答の分類作業を行った。カテゴリーの定義、カテゴリー化された回答数の集計及び分析方法について、荒井（2018）の方法に基づいて行い、今回の調査対象者である青年期以降の既婚者の回答内容から、再度分類カテゴリーの整理を行った。

1-①：各カテゴリーの説明と回答例

1-①-1）：項目「家の人はわたしに対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

「家の人はわたしに対して」への回答内容の分類は、主カテゴリーとして、「関心のあり方」（以下、「関心」と記す。），「関わりの評価や行動全般」（以下、「関わり」と記す。），「役割・責任」（以下、「役割」と記す。），「コミュニケーション・誠実性」（以下、「コミュニケーション」と記す。），「不明」，「家族の不在」（以下、「不在」と記す。），「その他」とした。「関心」は、下位カテゴリーとして、「支持・受容・肯定的態度」（以下、「支持」と記す。），「要求・期待・依存」（以下、「要求」と記す。），「無関心・不満」（以下、「無関心」と記す。），「厳格な態度・非難」（以下、「厳格」と記す。）の4カテゴリーに分類された。それぞれの分類カテゴリーに関する説明と回答例を表4に示す。今回の分類カテゴリーにおいては、荒井（2018）の分類から新たに「役割」を主カテゴ

表4 「家の人是我に対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

主カテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
関心	支持	家族が自己に対して支持、受容、肯定的態度を示している。また家族が、自己を気づかい、ケアしてくれる、自己に対して、愛情や感謝を示す、など。	「優しい」、「感謝している」、「協力的」、「理解してくれる」
	要求	家族が自己に対して何らかの要求をする、期待していることを示す。家族が自己に依存している、頼っていることを示す場合も含める。	「頼っている」、「頼る」、「とても甘えている」
	無関心	家族が自己に対して、無関心である、関わりを持たない、不満を持っていることを示す。悪意や否定的な態度を示す場合を含む。	「無関心」、「冷たい」、「別に何も」
	厳格	家族が自己に対し、厳格な態度や非難を示す。家族からの関わりにプレッシャーに感じることを示す回答も含む。	「厳しい」、「きつい」
関わり		家族と自己の関係についての評価、家族による自己に対する行動を示す。家族と自己の中立的な関わりや、心理的距離を表す回答、また他のカテゴリーに属さない行動全般を含む回答について、このカテゴリーに含める。	「普通」、「自然体」、「まあまあだな」、「友達のように」
役割		自己の家族内で担っている役割、家族内で負っている義務や責任を示す。	「仕事ばかりしている印象がある」(※「関わり」との複合的的回答)
コミュニケーション		家族が自己に関わる際の言語コミュニケーションの様態を示す、または誠実な態度や素直さを示す。	「〇〇(※名前)と呼ぶ」、「フランクだ」
不明		家族が自己に対してどう思っているかがわからないことを示す。	「どう思っているのだろうか」、「よくわからない」
不在		同居している家族が不在であることを示す。	「一人暮らしなので該当しない」、「居ない」
その他		上記のカテゴリーに含まれない回答、主語が家族か自己であるかが不明なもの、項目に関わりがない回答、無回答に準じるものである。	「特になし」、「家の人って言われても」、「必要な存在」

リーとして分類した。

1-①-2)：項目「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例  
「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類は、「関心のあり方」(関心)、「関わりの評価や行動全般」(関わり)、「役割・責任」(役割)、「コミュニケーション・誠実性」(コミュニケーション)、「家族の不在」(不在)、「その他」(その他)とした。「関心のあり方」は、下

位カテゴリーとして、「支持・受容・肯定的態度」(支持)、「不満・否定的態度」(以下、「不満」と記す。),「要求・期待・依存」(要求),「甘え・負い目」(以下、「甘え」と記す。),「厳格な態度・非難」(厳格),「無関心・無為」(以下、「無関心」と記す。)の6カテゴリーに分類された。それぞれの分類カテゴリーに関する説明と回答例を表5に示す。



表5 「わたしは家の人に対して」への回答内容の分類カテゴリーの説明と回答例

主カテゴリー	下位カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
関心	支持	自己が家族に対して支持、受容、肯定的態度を示している。また自己が、家族を気づかい、ケアする、家族に対して、愛情や感謝を示す、など。	「優しい」、「感謝している」、「愛情を持っている」、「信頼している」
	不満	自己が家族に対して、不満を持っている、また否定的態度を示す。悪意や攻撃の態度を示す場合を含む。	「不満を抱いている」、「冷たい」、「は、イライラさせられる」
	要求	自己が家族に対して何らかの要求をする、期待していることを示す。自己が家族に依存している、頼っていることを示す場合も含める。	「時間は守るように言っている」（※「コミュニケーション」との複合的回答）
	甘え	自己が家族に対して甘えている、負い目があることを示す。また、自己が、自己中心的な態度を示している場合も含める。	「わがままです」、「迷惑をかけている」、「申し訳なく思うことがある」
	厳格	自己が家族に対し、厳格な態度や非難を示す。家族を怒らすような指摘をする場合を含む。	「厳しいと思われている」（※「関わり」との複合的回答）
	無関心	自己が家族に対して、無関心である、考えや感情を何も持っていない、何もしないことを示す。	「無関心」、「特に何も思わない」、「なんともない」
関わり		家族と自己の関係についての評価、自己の家族に対する行動全般を示す。家族と自己の中立的な関わりや、心理的距離を表す回答、また他のカテゴリーに属さない行動全般を含む回答について、このカテゴリーに含める。	「普通に接する」、「自由である」、「感情的にならない」、「適度な間合いを保っています」
役割		自己が家族内の役割を担っていること、家族内で義務や責任を負っていることを示す。	「一生懸命頑張ってる」、「普通の父」、「生活費を稼ぐ」
コミュニケーション		自己が家族に関わる際の言語コミュニケーションの様態を示す、または誠実な態度や素直さを示す。	「よく話す」、「挨拶をする」、「暗い話はしないようにしている」
不在		同居している家族が不在であることを示す。	「一人住まい」、「というより同居している人がそもそもいない」
その他		上記のカテゴリーに含まれない回答、主語が家族か自己であるかが不明なもの、項目に関わりがない回答、無回答に準じるものである。	「なし」、「特になし」、「ラリホー」

1-②：複数のカテゴリーに属する回答

1-②-1：付加のカテゴリーとの複合的回答の例

荒井（2012, 2018）と同様に、単独のカテゴリーとしては分類しないが、他のカテゴリーに付加した形で分類に加えられる付加カテゴリーとして、「願望」、「両価性・極端・不定」（以

下、「両価性」と記す）、「頻度・時間的变化」（以下、「頻度」と記す）、を設定した（表6）。

1-②-2：複数のカテゴリーに属する複合的回答の種類

1-②-2-a：項目「家的人是わたしに対して」への複合的回答

表6 付加カテゴリーの説明と複合的回答の例

付加カテゴリー	カテゴリーの説明	回答例
願望	各回答に付加して、自己の欲求や願望を示す。	【家の人はわたしに対して】「長生きしてもらいたい」(「支持」,「関わり」,「願望」の複合),「感謝しているものと思っていた自分がある」(「支持」,「関わり」,「両価性」,「願望」の複合)など。
		【わたしは家の人に対して】「優しく接したい」(「支持」と「願望」の複合),「休みの日は旅行に行きたい」(「関わり」と「願望」の複合)
両価性	各回答のカテゴリーに付加し、回答内容がそれぞれ、次の場合に分類される。肯定的、否定的な意味の両面があり複雑なニュアンスを示す場合、極端さや過度な様子を示す場合、曖昧さを感じていることを示す場合、否定や意味を逆転させる表現を示す場合である。	【家の人はわたしに対して】「心配してくれる」(「支持」と「両価性」の複合で、「心配」は、ケアと不安という両価性を含む。),「至れり尽くせり」(「支持」と「両価性」の複合で、ケアの程度が過度である。),「気を使わない」(「関わり」と「両価性」の複合で、近しいこととケアしないことの両価性を含む。),「甘え過ぎ」(「甘え」と「両価性」の複合で、過度であることを示す。)など。
		【わたしは家の人に対して】「優しくできてるかなあ」(「支持」と「両価性」の複合で、曖昧さを示す。),「あまり怒ったりはしない」(「関わり」と「両価性」の複合で、否定を示す。),「ワガママすぎるのかもしれない」(「甘え」と「両価性」の複合で、過度の態度と曖昧さを示す。)
頻度	各回答のカテゴリーに付加し、回答内容がそれぞれ、次の場合に分類される。「時々」,「しばしば」,「いつも」,など頻度を示す場合、過去、現在、未来という時間の流れの中での変化の有無を示す場合である。	【家の人はわたしに対して】「優しい。いつもあたたかい」(「支持」と「頻度」の複合で、頻度が多い。),「昔とあまり変わらず接してくれる」(「関わり」,「支持」,「頻度」の複合で、過去から変化がない。)
		【わたしは家の人に対して】「頼りっぱなしだ」(「甘え」と「頻度」の複合で、頻度が多い。),「いらっとすることがある」(「不満」と「頻度」の複合で、多少の頻度を示す。)など。

「家の人はわたしに対して」への複合的回答のうち、2以上の回答数となった15種類の複合的回答の分類について、表7に示す。

典型的なパターンの複合的回答として、最も多くの回答数が見られた種類は、「支持・受容・肯定的態度」(支持)と「関わりの評価や行動全般」(関わり)の複合「支持+関わり」で、16の回答数となった。回答例としては、「寛容だと思う」、「敬意を払う」、「気を遣ってくれている」などであり、支持的な関係に加え、自己と家族の関係への配慮や上下関係を示す内容が含まれているものとした。また、「支持+関わり」に「両価性」あるいは「頻度」のカテゴリーを加えた回答もそれぞれ複数見られ

た。

「支持」を含む複合的回答としては、「支持+頻度」、「支持+両価性」の回答数が、それぞれ7ずつとなった。

また、上記以外で、回答数が5以上であった、複合的回答として、「要求+両価性」の回答数が9、「無関心+コミュニケーション」の回答数が6となった。

全体的として、「支持」、「関わり」、「両価性」のカテゴリーを含む複合的回答数が多い結果となった。

1-②-2)-b: 項目「わたしは家の人に対して」への複合的回答

表7 「家の人はわたしに対して」への複合的回答の種類

カテゴリーの複合	回答数	回答例
支持+関わり	16	「寛容だと思う」, 「敬意を払う」, 「気を遣ってくれている」
支持+頻度	7	「優しい時の方が多い」, 「常に1番の幸せを与えてくれる」
支持+両価性	7	「やさしいかな」, 「至れり尽くせり」, 「心配してくれている」
支持+関わり+両価性	3	「敬意を払っていない」, 「気を使うw」
支持+要求	3	「優しくしてくれ, 大事にしてくれるし必要としてくれる」
支持+コミュニケーション	2	「おつかれさま」, 「頼めば協力してくれる」
支持+関わり+頻度	2	「昔とあまり変わらず接してくれる」, 「いつも気を配ってくれている」
関わり+両価性	9	「とくに嫌ってはいないと思う」, 「良い点と悪い点をはっきり感じていると思う」, 「あまり気をつかいません」
関わり+コミュニケーション+両価性	3	「話がないみたい」, 「特に取り繕う事も無く基本的に素の自分を見せていると思われます」
関わり+役割	2	「仕事ばかりしている印象がある」, 「お母さんは大変と思っている」
無関心+コミュニケーション	6	「何も言わない」, 「うるさいという」
無関心+関わり+両価性	4	「おもちゃのように扱ってくる」, 「少しなめられている」, 「空気」
無関心+両価性	3	「何にも協力しない」, 「頑固だと思ってる」
要求+両価性	9	「多くは求めない」, 「甘えている。頼りにされているのか」, 「少し依存が過ぎるかもしれない」
要求+コミュニケーション	3	「欲しいものをよく言う」, 「勝手なことを言う」

「わたしは家の人に対して」への複合的回答のうち、2名以上の回答数が見られた28種類の複合的回答の分類について、表8に示す。

典型的なパターンの複合的回答として、最も多くの回答数が見られた分類は、「支持+関わり」で、20の回答数となった。回答例としては、「寛容・寛大でみんなの好きなようにさせている」, 「明るく雰囲気大切に生活している」, 「思いやりの心で接する」など、支持的な関係に加え、自己と家族の関係への配慮を示す内容が含まれているものとした。また、「支持+関わり」に「両価性」を加えた回答も複数見られた。

また、「支持+役割」, 「支持+願望」, 「関わり+両価性」は、それぞれ10以上の回答数であった。

上記以外で、回答数が5～9であった複合的回答は、「支持+頻度」(7), 「支持+コミュニケーション」(6), 「関わり+役割」(7), 「関わり+コミュニケーション+両価性」(5), 「厳格+不満+両価性」(6), 「役割+両価性」(5)となった。

全体的に、「支持」, 「関わり」, 「コミュニケーション」, 「願望」, 「両価性」, 「頻度」のカテゴリーを含む分類の複合的回答数が多い結果となった。

## 2. 各カテゴリーに属する回答数の比較

各カテゴリーに分類された回答数について、年代別、性別、配偶者との離別経験による回答数の差を $\chi^2$ 検定によって検討した。また、セルの度数が5以下となる場合には、イエーツの



表8 「わたしは家の人に対して」への複合的回答の種類

カテゴリーの複合	回答数	回答例
支持+関わり	20	「寛容・寛大でみんなの好きなようにさせている」、「明るく雰囲気を大切に生活している」、「思いやりの心で接する」
支持+役割	14	「は、家族サービスしてる」、「責任と愛情を持っている」、「優しく接するように努めている」
支持+願望	10	「やさしく接しようと思う」、「思いやりをもってすごしたい」、「健康を願っている」
支持+頻度	7	「いつも感謝している」、「感謝の心を忘れず接している」
支持+コミュニケーション	6	「家族が一番大事だと言っている」、「笑かしている」、「優しいと言われます」
支持+関わり+両価性	5	「なるべく優しく接することを心がけている」、「優しくおおざっぱ」、「気を使わずにいる」
支持+両価性	4	「優しいと自分では思っている」、「優しくできてるかなあ」
支持+頻度+願望	3	「末永く健康で幸せに暮らすことを願っている」、「家族が大好きなのでこれからも幸せに暮らしたい」
関わり+両価性	11	「どんな存在かな?」、「自由にやらせてもらっている」、「尊敬されない」、「深入りせず浅く付き合っている」
関わり+役割	7	「こどもたちとよくあそびます」、「自由にさせてる」、「進んで料理を作っています」
関わり+コミュニケーション+両価性	5	「だけ、自分の素の姿をさらけ出せる」、「上からモノを言ってしまう…」、「無理は言えない」
関わり+甘え	3	「ちょっと扱いが馴れてしまっている」、「少々不器用だ」
関わり+願望	3	「自由人になりたい」、「休みの日は旅行に行きたい」、「もっと一緒にいたいと思う」
関わり+両価性+頻度	2	「よくわからなくなっている」、「今まで旅行等一緒に行った回数はかぞえるほどしかない」
厳格+不満+両価性	6	「なるべく怒らないようにしている」、「イライラしたことがない」、「あまり怒りはしない」
厳格+両価性	2	「少し厳しい」、「は、結構シビアだ」
厳格+不満	2	「怒ることがある」、「冷徹な態度で接する」
役割+両価性	5	「必需品」、「役に立てているのかと思うことがある」、「ATM」、「どんな父親と思われているか」
役割+願望	3	「しっかり責任を果たしたい」、「よいお父さんでいられるように」
役割+その他	2	「必要とされている」、「妻の親族とやっとな別れられる」
コミュニケーション+両価性	2	「言いたいことを言い放題」、「愛想がない」
コミュニケーション+役割	2	「いうべきことは言う」、「はもっとコミュニケーションをはからないといけない」
コミュニケーション+願望	2	「言いたいこと言う」、「遠慮なく接していききたいと思ってる」
不満+両価性	4	「胡散臭い存在だな」、「優しくなれない」、「めちゃくちゃ」
不満+頻度	2	「常に怯えている」、「いらっとすることがある」
甘え+両価性	2	「甘えがちだ」、「ワガママすぎるのかもしれない」
甘え+頻度	2	「頼りっぱなしだ」、「今まで苦勞をかけたことが多いので」
要求+役割+願望	2	「もっと家の仕事を手伝ってほしい」、「家事の負担を軽減して欲しいと思っている」

補正を行った。

## 2-①：項目「家の人はわたしに対して」の各 カテゴリーの回答数の比較

項目「家の人はわたしに対して」に関して、全体では、「要求」( $\chi^2(1)=10.69, p<.01$ )については性差が有意であった。「支持」( $\chi^2(2)=7.83, p<.05$ )、「関わり」( $\chi^2(2)=7.30, p<.05$ )、「コミュニケーション」( $\chi^2(2)=9.69, p<.01$ )で年代による差が有意であった(表9)。

また男女別に年代による回答数を比較したところ、女性において「関わり」( $\chi^2(2)=6.72, p<.05$ )、男性において「支持」( $\chi^2(2)=7.15, p<.05$ )の回答数に有意差が見られた。

配偶者との離別経験による回答数を比較したところ、「支持」( $\chi^2(1)=4.15, p<.05$ )、「不在」( $\chi^2(1)=9.94, p<.01$ )に関して差が有意であった。

## 2-②：項目「わたしは家の人に対して」の各 カテゴリーの回答数の比較

項目「わたしは家の人に対して」の回答については、表10のとおり、全体では、性別に関して、「役割」( $\chi^2(1)=6.23, p<.05$ )、「願望」( $\chi^2(1)=5.84, p<.05$ )については性差が有意であった。年代に関しては、「役割」( $\chi^2(2)=9.11, p<.05$ )、「頻度」( $\chi^2(2)=6.80, p<.05$ )で年代による差が有意であった。

また男女別に年代による回答数を比較したところ、女性において「役割」( $\chi^2(2)=6.72, p<.05$ )、男性において「両価性」( $\chi^2(2)=9.16, p<.05$ )の回答数に有意差が見られた。

配偶者との離別経験による回答数を比較したところ、「不在」( $\chi^2(1)=22.18, p<.001$ )に関して差が有意であった。

## 3. 各年代、性別、離別経験による回答例

統計的に回答数に有意な差が見られたカテゴ

表9 「家の人はわたしに対して」のカテゴリー別回答数(クロス集計)

	関心				関わり	役割	コミュニケーション	不明	不在	その他	願望	両価性	頻度
	支持	要求	厳格	無関心									
女性													
10/20代(52名)	30	7	0	8	7	2	6	7	0	4	1	12	4
30/40代(52名)	32	9	4	5	11	4	5	3	0	6	1	14	5
50/60代(52名)	23	10	3	12	18	3	12	1	2	5	2	12	8
年代差					*								
男性													
10/20代(52名)	35	2	2	6	11	3	3	3	0	4	0	6	2
30/40代(52名)	25	2	3	10	17	1	4	3	1	2	1	10	3
50/60代(52名)	22	4	5	13	17	3	10	3	1	1	0	12	3
年代差	*												
性差(全体)		**											
年代差(全体)	*				*		**						
配偶者との離別													
なし(275名)	153	27	16	47	74	16	34	18	1	20	3	55	21
あり(37名)	14	7	1	7	7	0	6	2	3	2	2	11	4
群間差	*								**				

\*\*  $p<.01$  \*  $p<.05$

表10 「わたしは家の人に対して」の 카테고리別回答数（クロス集計）

	関心						関わり	役割	コミュニケーション	不在	その他	願望	両価性	頻度	
	支持	不満	要求	甘え	厳格	無関心									
女性															
10/20代(52名)	27	6	2	6	6	3	14	7	6	0	1	8	17	5	
30/40代(52名)	24	6	2	3	4	0	15	18	7	0	3	11	13	6	
50/60代(52名)	24	8	3	3	2	2	18	17	5	3	6	11	9	10	
年代差								*							
男性															
10/20代(52名)	26	6	1	3	5	2	12	5	6	0	5	4	3	2	
30/40代(52名)	17	2	2	5	2	4	16	11	7	1	4	3	13	3	
50/60代(52名)	28	3	2	3	2	2	18	8	4	0	2	8	14	8	
年代差													*		
性差(全体)								*				*			
年代差(全体)								*						*	
配偶者との離別															
なし(275名)	129	27	11	21	19	9	84	57	34	0	17	39	63	28	
あり(37名)	17	4	1	2	2	4	9	9	1	4	4	6	6	6	
群間差										***					

\*\*\*  $p < .001$  \*  $p < .05$ 

リーに関して、個別の回答例を取り上げ、各年代、性別、離別経験の有無による自己と家族の関係について検討した。

### 3-①：項目「家的人是わたしに対して」の回答例

項目「家的人是わたしに対して」に関して、「支持」の回答のうち、「優しい」という回答が典型的で、最も多く見られた。「優しい」という回答は、10/20代の男性が、30代以降の男性に比べて回答数が多い結果であった。

「要求」は、女性の方が男性よりも回答数が多かったが、「要求+両価性」の複合的回答と分類された「頼りにはしている」(30代女性)、「甘え過ぎ」(50代女性)という回答が女性においてのみ見られた。

「関わり」については、50/60代の女性の回答数が、40代までの女性よりも多かったが、そのうち「関わり+支持」の複合的回答と分類され

た「優しく、自由にさせてくれる」(50代女性)、「理解があり自由に行動することを見守ってくれてくれる」(60代女性)、「気遣ってくれる」(60代女性)という回答が、10名の50/60代女性で見られた。

「コミュニケーション」については、50/60代の男女で多く見られたが、「コミュニケーション+要求」の複合的回答と分類された「わがままを言う」(50代女性)、「勝手なことを言う」(60代女性)や、「コミュニケーション+無関心」の複合的カテゴリーと分類された「無言」(50代男性)、「声もかけず冷たい」(60代男性)などの回答が見られた。

「不在」については、配偶者との離別経験があるとする群において、「というより同居家族がいない」(40代男性)、「一人暮らしなので該当しない」(60代女性)という回答が見られた。

### 3-②：項目「わたしは家の人に対して」の回

## 答例

項目「わたしは家の人に対して」に関して、「役割」は、30代以降の女性に多く、「もっと努力しないといけないと思う」(40代女性)、「一生懸命頑張ってる」(50代女性)という回答が見られた。また、「役割+支持」の複合的回答と分類された「より心地よい生活ができるようにしている」(30代女性)、「優しく接するように努めている」(40代女性)、「仲良く心をかけています」(60代女性)などの回答が30代以上の15名の女性において見られた。

付加カテゴリーである「願望」については、女性の回答数の方が男性よりも多く、「支持+願望」の複合的回答と分類された「思いやりをもってすごしたい」(10代女性)、「健康を願っている」(30代女性)「優しく接したい」(50代女性)、「仲良く楽しく暮らしたい」(60代女性)などの回答が16名の女性で見られた。

付加カテゴリーである「頻度」については、50/60代の男女で多く見られたが、「支持+頻度」の複合的回答と分類された「いつも感謝している」(50代男性・60代女性)などの回答が見られた。

付加カテゴリーである「両価性」については、30代以降の男性の回答が、10/20代男性に比べて多かったが、「関わり+両価性」の複合的回答と分類された「やや淡泊」(30代男性)、「尊敬されない」(40代男性)、「なるべく謙虚にしているつもり」(50代男性)、「あまり遠慮はしていません」(60代男性)などの回答が13名の30代以上の男性で見られた。

「不在」については、配偶者との離別経験があるとする群において多く、「というより同居している人がそもそもいない」(40代男性)、「一人暮らしなので該当なし」(60代女性)という回答が見られた。

## IV. 考察

### 1. 回答内容の分類カテゴリーについて

文章完成法の「家の人わたしに対して」項目への回答内容の分類に関して、荒井(2018)から変更し、主カテゴリーとして「役割」を追加した。荒井(2018)では、未婚者を対象としたため、「家の人わたしに対して」の項目に対して「役割」をカテゴリーとして設定するほどの回答数とならなかったが、本研究では、「家の人わたしに対して」の16の回答について、「役割」に分類した。

また、「わたしは家の人に対して」の項目についての分類カテゴリーとして、荒井(2018)では、「役割」を、主カテゴリーである「関心」の下位カテゴリーとして設定したが、「役割」に分類された回答である「一生懸命頑張ってる」、「普通の父」、「生活費を稼ぐ」などは、家族に対する関心のあり方というよりも、自己の行動について言及した回答として意味づけて、主カテゴリーとした。

本研究においては、荒井(2018)と同様に、両項目とも、「家族の不在」のカテゴリーを設定したが、全体で4名のみの回答数となった。荒井(2018)では、調査対象者の2%(7名)以上の回答数がある時にカテゴリーとして設定したが、未婚者を調査対象とした研究との比較ができるように、少数の回答数であったが、カテゴリーとして設定した。

### 2. 複数のカテゴリーを含む複合的回答について

2-①：項目「家の人わたしに対して」の複合的回答

「家の人わたしに対して」の項目に対する複合的回答(( )は回答数を示す。)として、「支持+関わり」(16)、「支持+頻度」(7)、「支持+両価性」(7)など、「支持」と他のカテゴ

リーとの複合となる回答が多く見られた。

また、「関わり+両価性」(9) など、「関わり」と他のカテゴリーの複合となる回答も多く見られた。その他の典型的な複合的回答としては、「要求+両価性」(9) が見られた。

上記の複合的回答のパターン、回答数の傾向については、荒井(2018)の未婚者を対象とした結果と類似しており、既婚者と未婚者を比較すると、家族から自己への関わりに関して、特徴的な違いが見られなかった。「支持+関わり」の複合的回答例として、「寛容だと思う」、「敬意を払う」、「気を遣ってくれている」などは、未婚者を対象とした調査においても類似の回答が見られている。

荒井(2018)の「家の人はわたしに対して」の項目に対する複合的回答の結果においては、「無関心+両価性」の複合的回答の回答数が9となったが、今回の結果では、「何にも協力しない」、「頑固だと思ってる」など、3名の回答が「無関心+両価性」に分類された。未婚者と既婚者の違いについては、さらに個々のカテゴリーの回答数から比較、検討をすることが必要である。

## 2-②：項目「わたしは家の人に対して」の複合的回答

「わたしは家の人に対して」の項目に対する複合的回答として、「支持+関わり」(20)、「支持+役割」(14)、「支持+願望」(10)、「支持+頻度」(7) など、「支持」と他のカテゴリーとの複合となる回答が多く見られた。「支持+関わり」の回答が最も多かったのは、「家の人はわたしに対して」の項目と同様であり、「寛容である」「気をつかう」など、共通する内容が含まれていた。その一方で、「支持+役割」、「支持+願望」は、「わたしは家の人に対して」の項目に限って、典型的に見られた複合的回答であった。「支持+役割」の回答例では「は、

家族サービスしてる」などで、「支持+願望」の回答例では、「やさしく接しようと思う」などであり、自己から家族に対して支持しようという役割意識や欲求が表れていた。

また、「関わり+両価性」(11)、「関わり+役割」(7) など、「関わり」と他のカテゴリーの複合となる回答も多く見られたが、この点は、「家の人はわたしに対して」の項目と同様の傾向であった。

「支持」と「関わり」以外に、「厳格」、「役割」、「コミュニケーション」、「不満」、「甘え」、「要求」を含む複合的回答の数が複数見られたが、これらは、「家の人はわたしに対して」の項目への複合的回答とは、異なる傾向を示していた。それらの複合的回答のうちの典型例として、「厳格+不満+両価性」(6)の回答例は「なるべく怒らないようにしている」などであり、「役割+両価性」(5)の回答例は「必需品」、「役に立てているのかと思うことがある」などであった。これらは家族に対する怒りや、家族に対する役割をめぐって揺れる心情などが、典型的なパターンとして表現されていると言える。

また、荒井(2018)の「わたしは家の人に対して」の項目に対する「支持」や「関わり」を含む複合的回答は、今回の結果において同様の傾向が見られた。その一方で、今回の結果では、「役割」、「厳格」を含む複合的回答が顕著であった。家族に対する、自己の「役割・責任」、「厳格な態度・非難」に関わる態度が、既婚者において特徴的であると考えられる。

## 3. 各カテゴリーに属する回答数、回答例の比較

### 3-①：項目「家の人はわたしに対して」の回答の比較

年代別、性別、配偶者との離別経験の有無による回答傾向を検討するため、項目「家の人は



わたしに対して」の各カテゴリーの回答数を比較したところ、「優しい」という回答が典型例であった「支持」の回答数は、10/20代の男性が、30代以降の男性に比べて多かった。既婚男性において30代以降に、家族からの優しさを感じる割合が低くなると考えられる。

「要求」は、女性の回答数の方が男性よりも多く、中でも「頼りにはしている」(30代女性)、「甘え過ぎ」(50代女性)など女性においてのみ見られた「要求+両価性」回答が示しているように、家族から依存され、甘えられることに複雑な気持ちを抱くことが既婚女性において特徴的である。

「関わり」については、50/60代の女性の回答数が、40代までの女性よりも多く、「優しく、自由にさせてくれる」という例のような「関わり+支持」の複合的回答や、「特に取り繕う事も無く基本的に素の自分を見せていると思われます」(50代女性)のように「関わり+コミュニケーション+両価性」の複合的回答が50/60代女性に見られた。「関わり」は関係への配慮や中立的関わり、心理的距離、さらに残余的カテゴリーとして設定されているが、50代以上の既婚女性において、家族関係の距離や、中立的な関わりへの意識が高まる可能性が示された。

「コミュニケーション」については、50/60代の男女の回答の割合が高く、「コミュニケーション+要求」、「コミュニケーション+無関心」という複合的回答や、「楽な母だと言う」(50代女性)のように「コミュニケーション+関わり+役割」の複合的回答の例が見られた。コミュニケーションの有無や言葉で伝えられる内容に50代以上の既婚者の意識が向く傾向がある。

配偶者との離別経験の有無による差が見られたのは、「支持」と「不在」のみであった。離別経験がある場合に、「支持」の回答数の割合が低くなることと、不在を示す回答が特徴とし

て見られたが、その他の関わりの特徴は明らかになっておらず、配偶者との離別の影響については、より細やかに項目の設定や分析方法を検討することが必要である。

項目「家の人はわたしに対して」の各カテゴリーの回答数に関して、荒井(2018)の結果と比較すると、男女ともに「支持」に関する回答では、同様の傾向が見られた。今回の調査において、その他のカテゴリーを含む回答数で、年代や性による差が見られたものについては、荒井(2018)と異なる結果となっており、それらは未婚者と既婚者で異なる特徴を示していると考えられる。

### 3-②：項目「わたしは家の人に対して」の回答の比較

項目「わたしは家の人に対して」への各カテゴリーの回答数を比較したところ、「役割」は、男性よりも女性の回答で多く、女性の中でも30代以降の女性に多く見られた。30代以降の女性において、家族に対して役割意識や責任感を示す傾向があると言える。さらに、30代以降の女性において、「役割+支持」の複合的回答の多さが示すように、家族を支持することに努力する傾向が示された。

自己の家族に向けての態度として、「願望」を示す回答は女性に多く、さらに「支持+願望」の複合的回答の多さから、家族の良い関係を願う気持ちが女性において多く表れていた。

一方、男性においては、付加カテゴリーの「両価性」が、30代以降の男性で多くなり、中でも「関わり+両価性」の複合的回答の多さから、家族との関係への配慮や中立的関わり、心理的距離などをめぐり複雑な心情を示す傾向が表れた。

付加カテゴリーの「頻度」を含む回答が50代以上の男女において、多く見られたが、自己の家族との関わり方の頻度や時間の流れの中での

変化に意識が向く傾向が高くなると考えられる。

配偶者との離別経験がある場合に、「家族はわたしに対して」の項目と同様に、「不在」のカテゴリーの回答が特徴的に見られたが、その他の関わりの特徴は示されなかった。

項目「わたしは家の人に対して」の各カテゴリーの回答数に関して、荒井（2018）と比較すると、女性において「願望」を含む回答が多い点で共通していたが、その他の性差や年代による差については異なる結果であり、未婚者と既婚者の違いが示されていた。特に、今回の結果における、役割意識や責任感の回答は既婚者における自己と家族の関係の特徴を示していると考えられる。

#### 4. まとめ

本研究では、文章完成法を用いて、既婚者における自己と家族との関係について検討するため、2項目に対する回答の分類を行い、年代別、性別、配偶者との離別経験によって比較、分析した。

自己と家族との関係における支持・受容・肯定的態度に関する回答には性差は見られず、年代による差も、30代以降の既婚男性において家族から自己への「支持」の回答数の割合が低くなるという結果であった。

この結果は、伊藤（2016）などが、妻の満足度や愛情得点が夫よりも低いと指摘していることと矛盾する面もあるが、妻の満足度や愛情が低いために、家族からの「支持」が低くなると30代以降の夫が感じるということに対応しているかもしれない。

また、本研究において、家族から自己への要求、期待、また自己から家族に対する役割意識、願望を含む回答数に関して、女性の方が多かったことは、伊藤らの妻の満足度の低さに関連している可能性がある。つまり、家族からの

要求や期待、さらに自身の役割意識や責任感、さらに家族を支持、受容したいという願望は、女性の方が男性よりも高い傾向があり、それらが、女性にとってストレスの要因になっているということである。このような見方は、夫婦のそれぞれの立場を理解することに繋がると考えられる。

本研究においては、配偶者との離別経験の有無による自己と家族の関係の特徴を示す結果が十分に得られなかったため、離別経験の影響については、文章完成法による質問項目や分類カテゴリーの有効性も含めて検討する必要がある。

自己と家族との関係や、その他の家族イメージに関して、各年代における未婚者と既婚者の回答数の違いを分析することにより、家族のライフサイクルを含めた、家族内において多様な立場が交錯する関係について検討することも今後の課題である。

#### 引用文献

- Ahrons, C (2016) Divorce: An unscheduled family transition. In McGoldrick, M., Carter, B., & Garcia, N. (Eds.) (2016) The expanded family life cycle (5<sup>th</sup> ed.) (pp.376-393). Boston: Pearson.
- 荒井真太郎 (2012) 文章完成法における家族イメージの表現内容の分類 佛教大学教育学部論集, 23, 107-129.
- 荒井真太郎 (2018) 文章完成法による自己と家族との関係の表現について—青年期以降の未婚者を対象として— 佛教大学教育学部学会紀要, 18, 1-15.
- 福丸由佳 (2019) 乳幼児を育てる時期 日本家族心理学会 (編) 家族心理学ハンドブック 金子書房 pp.105-111.
- 平木典子 (2013) 現代日本の結婚・離婚～家族と仕事の葛藤から統合へ 日本家族心理学

- 会 (編) 現代の結婚・離婚 (家族心理学年報31) 金子書房 pp.2-17.
- 池田政子・伊藤裕子・相良順子 (2005) 夫婦関係満足度に見るジェンダー差の分析——関係は、なぜ維持されるか 家族心理学研究, 19(2), 116-127, 2005.
- 稲葉昭英 (2002) 結婚とディストレス 社会学評論, 53(2), 69-84.
- 伊藤裕子 (2015) 夫婦関係における親密性の様相 発達心理学研究, 26(4), 279-287.
- 伊藤裕子 (2016) 夫婦関係に関する生涯発達の研究の動向 宇都宮博・神谷哲司 (編) 夫と妻の生涯発達心理学 福村出版 pp.36-52.
- 伊藤裕子, 相良順子 (2012) 愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討——中高年期夫婦を対象に—— 心理学研究, 211-216.
- 柏木恵子 (2006) 夫婦関係・カップル関係の変化とその心理 日本家族心理学会 (編) 夫婦・カップル関係 (家族心理学年報24) 金子書房 pp.2-23.
- 柏木恵子 (2016) 社会変動と夫婦関係をめぐる発達の課題 宇都宮博・神谷哲司 (編) 夫と妻の生涯発達心理学 福村出版 pp.36-52.
- McGoldrick, M., Carter, B., & Garcia, N. (Eds.) (2016) The expanded family life cycle (5<sup>th</sup> ed.) Boston: Pearson.

(あらい しんたろう 臨床心理学科)